里の春、山の春

新美南吉

野原にはもう春がきていました。
桜がさき、小鳥はないておりました。
けれども、山にはまだ春はきていませんでした。
山のいただきには、雪も白くのこっていました。
山のおくには、おやこの鹿がすんでいました。
坊やの鹿は、生まれてまだ一年にならないので、春とはどんなものか知りませんでした。
「お父ちゃん、春ってどんなもの。」
「春には花がさくのさ。」
「お母ちゃん、花ってどんなもの。」
「花ってね、きれいなものよ。」

「ふウん。」

けれど、坊やの鹿は、花をみたこともないので、花とはどんなものだか、春とはどんなものだか、よくわかりませんでした。

ある日、坊やの鹿はひとりで山のなかを遊んで歩きまわりました。

すると、とおくのほうから、

「ぼオん。」

とやわらかな音が聞こえてきました。

「なんの音だろう。」

するとまた、

「ぼオん。」

坊やの鹿は、ぴんと耳をたててきいていました。やがて、その音にさそわれて、どんどん山をおりてゆきました。

山の下には野原がひろがっていました。野原には桜の花がさいていて、よいかおりがしていました。いっぽんの桜の木の根かたに、やさしいおじいさんがいました。

仔鹿をみるとおじいさんは、桜をひとえだ折って、その小さい角にむすびつけてやりました。

「さア、かんざしをあげたから、日のくれないうちに

山へおかえり。」

仔鹿はよろこんで山にかえりました。

坊やの鹿からはなしをきくと、お父さん鹿とお母さん鹿は口をそろえて、

「ぼオんという音はお寺のかねだよ。」

「おまえの角についているのが花だよ。」

「その花がいっぱいさいていて、きもちのよいにおいのしていたところが、春だったのさ。」

とおしえてやりました。

それからしばらくすると、山のおくへも春がやってきて、いろんな花はさきはじめました。

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
入力：めいこ
校正：もりみつじゅんじ
2002年12月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。